幼稚園における「木工」に関する研究

清　原　みさ子

はじめに

手を使い道具を使って作る活動は、現在、幼稚園や保育所でよく行われている。その中で、紙を材料とした製作が、最もよく行われている。歴史的にも、1876（明治9）年に東京女子師範学校附属幼稚園が開設され、そこでの保育は、フレーベルとその弟子たちによる恩物（Gabe）と作業（Beschäftigung）に重点が置かれていた。この作業の中で行われてきたのは、主として紙を材料にして、鋏や針等を道具にして作ることや、豆細工、粘土細工であった。その中に木工は出てこない。

では、木を材料にして加工する木工は、幼児達にやれるのであろうか。本格的なことは難しいが、金槌で釘を打ったり、のこぎりで切ることは、幼児達にも出来る。ここではそうした活動を、「木工」と呼ぶことにする。本論文では、この「木工」の意義について簡単にふれた後、幼稚園ではいつ頃から「木工」が取り上げられるようになったのか、またどのように行われていたのか明らかにすることを目的とする。

1.「木工」の意義

歴史的にも現在も、最もよく行われているのは紙を材料とした製作、作業である。紙は手でちぎることも出来るし、鋏で簡単に加工出来る。また、入手も容易である。だが、紙を材料とすると、作って遊ぼうとする場合に、作れるものが限られる。大きなものは作りにくい。木を材料とすると大きなものも出来るし、丈夫で繰り返し使うことも可能になる。作った時の達成感も大きい。

木材と釘を使って組み立てていく時には、作る順序を考える必要がある。例えば箱状の物を作る時、まず板のどことどこを組み合わせて釘で打ち付ければ

よいか、次にどの板をどこにつければ良いかを考えないと出来上がらない。また、屋根に小さな長方体の煙突がついた家を作ろうと思ったら、屋根の裏側から釘を打ち、煙突になる長方体をつけてから、家の壁に屋根をのせないと出来ない。このように、頭の中で形と作る順序を考えていく中で、思考力、構成する力がついていく。

「木工」をするには、集中力が必要である。金槌で釘を打つには、目と手の協応も必要であるが、意識を釘と金槌に集中してやらないと、うまく釘の頭を打つことが出来ず、指を打ってしまう。もちろん、金槌に限らず道具を使うときには集中力が必要であるが、釘を何本も打ち込むには相当に集中しなければならない。大人なら釘を指で支え軽く2～3回打ち、指を離して2～3回で打ち込める場合でも、幼児がやると10回くらい打つことが多い。例えば、幼児が1本の釘を打ち込むのに10回金槌で打つとすれば、10本の釘を打ち込むには100回も金槌で打たなくてはならない。それにはかなりの集中の持続が求められる。

「木工」だけではないが、材料は見ているだけでは変化しない。変化させるには自ら働きかけなければならない。紙のように手だけでも変化させることが出来る材料もあるが、木を変化させるには道具が必要である。自らの意思で道具を手に取り、それを使って材料を変化させ、物を作るのは、主体的活動である。

「木工」の持つ意義として、大きいものが出来ることから、協力することが必要とされる活動であることも上げられる。実際に大きな板を打ち付ける時には、板を押さえる役割が不可欠である。数人で役割分担しながら進めると、うまくいく。協力する大切さを実感できる活動である。

以上のように、思考力や構成力、集中力、自主性や主体性を育て、協力する必要性やすばらしさを伝えることが出来る「木工」の持つ意義は大きい。しかし、「木工」を保育・幼児教育で取り入れていくには、保育者に材料や道具を準備し、使いこなす力量が求められる。保育者が、そうした力をどのようにつけていくかが課題となるが、これについては別な機会に取り上げたい。

2.「木工」の紹介

1876（明治9）年に東京女子師範学校附属幼稚園が設立され、そこでの保育では、フレーベルとその弟子たちによる恩物と作業に重点が置かれていた。この作業の中には、豆細工や粘土細工、織紙、剪紙をはじめとする種々の紙細工が含まれていたが、「木工」は入っていなかった。明治時代の後半になると、恩物や作業も幼児に難しいと思われることは省き、環と箸を一緒に並べるような試みも行われるようになるが、この時代には「木工」に関する記述は見当たらない。1886年に高等小学校で、1890年には尋常小学校で、手工が初めて加設されるが、木工は高等小学校で組まれることが多かった。尋常小学校で取り上げられていたのは、粘土細工、豆細工、紙細工であったので、さらに低年齢の幼稚園で「木工」が取り上げられないのは当然であった。

では、いつ頃から「木工」に関する記述が見られるようになるのであろうか。大正時代に入り、モンテッソーリをはじめ新教育の思想と実際が紹介され始め、アメリカで伝統的なフレーベル主義に対する改革運動が広がり、その状況が紹介される中で、「木工」に関する記述が見られるようになる。

幼児教育に関する代表的な雑誌である『幼児の教育』には、1919(大正８)年の第５号に谷本富が神戸で講演した内容が「幼稚園教育学講義」として紹介されている。その中で、スタンレー・ホールの『教育上の諸問題』についてふれられ、ホールが上げた７点の改良意見が紹介されている。その一つとして「種々の木材や石材などを多く備へて置いてその利用の途を工夫させ、且つこれによりて建築術上の智識を得させること」[1]という記述が見られる。

1921年には、アメリカ滞在中の倉橋惣三が、シカゴ郊外の幼稚園の様子を「森の幼稚園」として紹介している。その中に「ストーブの両側がドアーになつて居て、その外が子供の細工場になつて居ます。ストーブの後ろといふことが、如何にも細工場らしい心持を伴ひます。こゝだけは木切れ、鋸屑で程よくちらかつて居る中に、いろいろの大工道具などが置いてありました」[2]という記述が見られ、「木工」が行われていたことがわかる。

1923年1月から、「万国幼稚園協会案幼稚園要目」が、雑誌『幼児の教育』に訳されて紹介される。その「第三章　製作」のところに、木材や釘付けに関

する記述が若干見られる[3]。これは、翌年に『幼稚園保育要目』[4]として、単行本で刊行されている。

木材については、「木質の柔かい種々な木材、種々な大きさや形に切た木片」という記述や、「白松やシナの木の様な柔い質を選ぶ」という記述が見られる。子ども達は「個々の目的に最もよく適する木片を選んで合せたり、釘付けにしたりする」。どのようなものを作るかに関しては、「大きい人形の為の簡単な家具、又木箱を使て子供達が自分で造た人形の家の為の小さい家具、人形の車、農園又は雑貨店の車、クリスマスの玩具店の玩具、小公園や遊園の装置、鳥小舎、苗床」が上げられている。子ども達によって色が塗られ、粗雑ではあっても堅牢で、遊べるようなものを作るように考えられていたことがわかる。

『幼児の教育』の1923年の第5号には、「製作に於ける自由材料と廃物使用」[5]が載っている。ここでは、幼稚園と幼学年の製作について述べられている。製作は「子供の自発的な、有目的活動」で、材料は「発表の手段」である。「製作は思考を伴ふ自由な実験」でなければならず、「子供の本能的な興味を惹く様に上手に材料を選ぶと云ふ事が大切である」として、5種類にまとめて材料について述べられている。その一つに、「Ⅳ、木材の自由材料及廃物の使用」があり、大小の木片や種々の箱、釘や糸まき等が上げられている。「木材でする製作は道具を使てするので更に価値がある。はじめ子供は、たゞ金槌を打つ丈でたくさんであるがまもなく鋸をひく事に興味を持つ」が、それは「合はせたり釘付けたりする前にまづ望み通りの形に材料を切るといふ事が必要になるから」であると述べられている。「幼稚園及低学年」の題材としては、「人形の家」「玩具」「鳥の家」「雑貨店」「室の鉛筆棚」「花さし」等、10例上げられている。これは、「－The Kindergarten and First Grade－から」となっていて、書いたのは「メリー、ウ井ルコツクソン」である。

1924年に出版された翻訳書『保育学校の実際研究』には、観察記録としてハンマーで釘を打つ様子が記されている。この著書は、幼児の「木工」について紹介された早いものの一つである。原本は1922年に出された A Nursery School Experiment で、ニューヨーク市の教育研究所附設の実験保育学校の実際が記されたものである。訳者は、心理学関係をはじめ多数の著書を残し

ている青木誠四郎である。「戸外の活動」のところに以下のような記録[6]と、地面と思われるところに直接板を置いて釘を打っている写真が紹介されている。

b－槌と釘　千九百二十一年、十月二十四乃至三十一日

ダヴイド（一歳七ケ月）及ジムミイ（二歳二ケ月）がハンマーをもつて入つて来た。七本の釘を厚い板の上にのせてジミーに槌を渡す。ジミーは槌の頭の方を握つて打つ、みな頭まで打ちこんでしまふ。それからどうして抜くかを教へる。そしたら子供は自分で抜いて見た、間もなく抜けるようになつた。すると同じ穴に釘を入れてまたそれを抜いて見る。

千九百二十一年十一月二十一日乃至二十八日

ジミーは棚にはひのぼつてハンマーを得て、釘をもらつてそれを悉く打ちこむ。それから直ぐにハンマーの爪の方でそれをぬいた。古い穴を選んで釘をうつたのであつたけれども、まつすぐにそれを打つて誤らなかつた。

ダヴイド（一歳八ケ月）は古い穴を用ひずに新らしいところへ打ちこんだ。それから、それを抜かうとしたけれども、なかなかむづかしかつたから、ハンマーの先の方を握つてぬかうとした。

千九百二十二年、三月、十三日乃至二十日

ダヴイドはある朝釘を打つ、板の所かまわずに釘を打ちつけて、強くその頭をうち、抜くにもあまり困難なしに抜けた。

この記述から、かなり低年齢の幼児達が金槌を使っていたことが分かる。しかも、釘を打つだけでなく、抜くことまでやっている。釘の長さ、板の材質の硬軟はわからないが、本当にこの年齢の幼児達がやっていたのか、いささか疑問に思われるが、こうした紹介を読んで、幼稚園でも出来そうだと考える教師が出てきたであろうことは、想像に難くない。

雑誌『幼児の教育』を見ていくと、1925年の第25巻第3号で紹介された「欧米の保育状況（一）」の中に、「木工」に関する記述が出てくる。これを書いたのは、大阪市船場幼稚園長の上島直之で、前年の約1ヵ年の欧米の教育視察中に見た独、英、米の幼稚園の状況について述べている。「フレーベルやモンテッソリーの恩物以外に重要な保育材料の多い事」のところに「紐育ホレースマンの幼稚園」があり、「実際作業」の一つに「木工」が取り上げられている。

そこでは、「室の一隅に一個の細工台ありて、材料としては色々の長さ及広さの半インチの柔き松板、軸及びテーブルの脚等を作る為めに長い木を用ひ、道具としては、ハンマー、鋸、メートル箱、錐、カスガヒ、丁規、ネジ廻シ、サンドペーパー等」が備えられている。細工台が一台であっても、「一斉的に取扱はないから十分之で間に合ふ。個別的取扱は経済方面から考へても必要である」という。製作品の主なものは、「簡単な器具(人形のベツト、テーブル、イス、腰掛等)」「乗物(馬車、ボート、手押車、汽車等)」「実用品(箱、本立、状挿し、額縁等)」であり、これらはペンキ等で装飾される。「此材料は余程実用的で児童の生活に密接なものがある」という[7]。紹介はこれだけなので詳しい状況はわからないが、製作品の主なものを見ると、作った後に使って遊んでいたであろうことはわかる。

同じ幼稚園について、堀七蔵が参観した時の様子を『幼児の教育』第28巻第11号で紹介している[8]。この幼稚園長は、アメリカの幼稚園改革運動の中心であったパティ・スミス・ヒルであった。翌月の第12号には、参観の続きとしてニューヨークの保育学校の様子が掲載されている。ここでは戸外で「木工」が行われていて、その様子が写真と説明で紹介されている。釘を打っているところの写真の説明では、「重い金鎚で釘を打込でゐる所であります。注意を釘の頭に集中して打込む積りの金鎚はあやまつて指を打つことも幾度かありませう。これも二三歳の幼児が必ず行ふ動作。大人が置忘れた金鎚は必ず幼児の遊び道具となり、指を打つて泣かねば止まぬ興味ある作業であります。たとへ釘が曲つてもとれなくなつたときの得意さ。努力の結果が眼前に現はれる動作、幼児には誠に面白い遊びであります是等の遊びは何時試み、何時成功するか等保姆は観察を怠らず必ず記録して研究調査することは勿論であります」と述べられている。この保育学校は、教育実験所に併置されていて、「十八ケ月位から満三歳までの健康児を科学的に記録調査してゐる所」で、10人の幼児に保姆は助手とともに3人いるという。3歳からは隣り合った都市田園学校に行くが、そこでも「石油箱やビール箱の如きもので一生懸命に釘付をして共同作業をやつてゐます」と述べられている[9]。

同じ第28巻第12号に、東京女子高等師範学校体操科教官宮田覚造の「アメ

リカの幼児教育を見て（二）」が掲載されている。そこでも、登園後「各自が欲する所の種々なる活動をなす事が出来」、その中に「鋸で木をひく者」もいる。また、運動教育について観察した二三の点に関して述べたところに、「次に運動道具が大きいといふ事であるが手工の道具にせよ鋸にせよ、或はつみ木にせよ、組みたてた家にせよ、非常に我国に於ける幼稚園の道具とは趣を異にしておる様である」と述べられている[10]。

欧米の保育学校や幼稚園での「木工」が紹介されているが、どこでも「木工」を取り入れていたわけではない。『幼児の教育』第29巻にも、堀七蔵の「私の視察したる米国の幼稚園教育（五）」や「私の視たる米国の幼稚園教育（ボストン）」等[11]が掲載されていて、ニューヨークやボストン等の幼稚園の様子がわかるが、そこでは「木工」に関する記述は見られない。アメリカの幼稚園がどこでも「木工」をやっていたわけではないことがわかる。

3．日本の幼稚園における「木工」の取り組み

幼稚園で実際に「木工」が取り入れられるのは、いつ頃なのであろうか。『幼児の教育』等に「木工」が紹介されるより少し前に、神戸幼稚園で取り組まれていた。雑誌『幼児の教育』の1919（大正８）年の第3号に、「神戸幼稚園の新しき試みの一と端（一）」が紹介されている。「昨年の九月より新らしき試みを実施致しまして」「初めに試みたのは澱粉の製造で」「次に思ひ付たのは染物でした」「次に思ひ付いたのは種々の玩具を製造することでした」「次に尤も幼児の喜ぶのは大工仕事でしたこれにも澤山の工夫がされました第一に自分の弁当の札や女の子には機織の道具や下駄や机や飛行機、軍艦、シグナル、梯子などは主なるものでした」と記述されていて、新しい事として「大工仕事」が行われていたことがわかる[12]。翌月には同じ幼稚園の時間割が紹介されていて、「毎日出す遊具」の表の中に「大工」「大工道具」も上げられていた。その様子として、「色々の準備をする大（ママ）。工遊びをするものは机を運び道具を持つて来て用意するものもあれば粘土の仕度をする者もある」[13]と書かれていて、幼児達が自由に選択する活動の一つとして「木工」が行われていた。欧米の幼稚園や保育学校の視察をした保育関係者から紹介されたのではないかと思われる

が、どのようにして取り上げられるようになったのか、またどのように行われていたのかに関しては、ほとんど記述されていないのでわからない。

1925年には、東京女子高等師範学校附属幼稚園の保姆が、『幼児の教育』に「幼児の自由か保育者の予定か」[14]と題して、やっていることのあらましを述べている。そこでは、「保育の項目と申しませうか」として「お話、唱歌、遊戯、自由画、ぬりゑ、粘土、紙仕事、きりがみ、つなぎもの、織紙、大工仕事、観察」「などをとつております」と記されていて、「大工仕事」という言い方で「木工」が取り上げられていたことがわかる。だが、ここでは項目のみなので、その中でどのようなことが行われていたかはわからない。

この3年後の『幼児の教育』第28巻第10号の「口絵」の一つは「大工仕事」で、東京女子高等師範学校附属幼稚園で幼児達が「木工」をしている写真が掲載されている。写真には6名の男児が写っていて、そのうちの2名が机上で金槌を使っている。机の上には、作りかけのものが置いてある。本文中に、写真の説明とも言える新庄よしこの「幼児の仕事の一つ　—大工仕事—」[15]が載っている。1頁だけの短いものであるが、「木工」の様子がわかる。これによると、冬の寒い日の男の子の仕事の一つとして、大工道具を使うことを始めてみたという。「幼児には鉋もかけられようはなし鋸も使へまいし、まして自分で計画して思つた通り作るといふ事は勿論望みもしなかつた」ので、「子供の仕事とも先生の仕事ともつかずどんな風に出来るかと始めた」ところ、「板はたやすく鋸できれるので幼児の一人にさせたところかなり上手にきるし釘はうてる」「五六人が代りあつて板をきつたり釘をうつたりして」いる。「かういう風にすればいゝといひ出すもの」もあれば、「何をしても出来なくて困つて居た子が大好きでこれをする時ばかりは非常な熱心と巧みさをあらはす」こともあり、家が完成していく喜びと同時に「かうした子供の力を見つけ出したことを大変うれしく思つた」という。注意点として、「先生も面白いのでつい自分でしてしまひたくなるので先生がし過ぎない様に気をつけ」ることと、「あぶない道具をつかふのでこれの処置や始末にも注意」することが上げられている。このときは「お茶の水の停車場」を作っているが、「停車場のみに止らず幼児からの申し出によるこれに関連したものを順次につゞいて作りたいと思つてゐ

る」と結ばれている。この文章中に、1923年の関東大震災の前にも「木工」をしたことがあり、停車場を作ったことが出てきて、そのときの様子はわからないが、「木工」をやっていた事はわかる。

同じ年の『幼児の教育』には、及川ふみが書いた「連続的作業を中心としての手技」[16]も掲載されている。その中には、「幼稚園の手技の種類も粘土、紙仕事、きびがら、つなぎもの、縫とり、大工仕事、などゝ数へあげれば数々あります」と記されていて、ここからも手技の一つとして、「木工」が取り入れられていたことがわかる。その題材については、「木工」に限らず一般的な考え方として、「先づ四季の季節」や「年中行事」を思い浮かべ、「幼児の家庭生活、社会生活、幼稚園生活にふれて最も手やすい材料を選ばねばなりません」と、述べられている。方法として、「先生があれこれといかにも面白そうにしてゐるので、幼児もつひつりこまれて渦巻の中にまきこまれるといふ様に、はじめのうちは保姆の方から積極的態度に出るといふ事も許さるべき一つのみちゆき」であるとされ、保姆の側から働きかけ、保姆がともに行い支えることも一つの方法であると考えられていたことがわかる。「木工」の場合には、特にこうした方法が取り組みやすかったと思われる。

1929(昭和4)年の『幼児の教育』第29巻には、第7号から第12号にかけて「保育座談会」が5回にわたって掲載されている。この座談会は東京女子高等師範学校附属幼稚園で開かれたもので、当時女高師教授であった倉橋惣三、附属幼稚園主事の堀七蔵、及び附属幼稚園の保姆達が話し合っている。時によっては、上記以外にも参加者がいた。第1回は「自由画」、第2回は「分団作業に適当な人数の最少限度」、第3回は「ぬりゑ」と「きり紙」、第4回が「粘土」、第5回が「木工・きびがら細工・豆細工・摺紙・織紙」について取り上げられている。第5回の座談会では、「木工」についての話し合いの記録が一番長い。この会の参加者は、倉橋と堀、幼稚園保姆の及川、新庄、菊池、神原、徳久、白根、坂口であったが、倉橋は途中からの参加で、「木工」の時には、話に加わっていない。「木工」に対する考え方と取り組みの実際が窺えるので、少し詳しく見ておきたい[17]。

堀の「木工は子供だけでやらせた経験は」という問に対して、新庄も及川も

子どもだけで計画を立ててやることは出来ないと答えている。堀が「外国でも板を切るのと鎚で釘を打つことだけだ」と発言し、保姆達も、「板を切る事と釘をうつことは子供に出来」、「みんなが釘を打ちたくてしようがない」と言っている。

堀が「外国では先生がこしらへといたものを見て作り度い子供が作つてゐる。その時は先生は手伝はない。薄い板と柱になるものとを用意しといてやる」と話すと、新庄は「そんなし易すい薄い板は釘をうつとすぐ折れますもの」と言い、及川もフレーベル館で買った幅一寸長さ二尺くらいの薄い板は「釘を打つとポキンと割れたりしてね。切るのにラクなものだとを（ママ）釘打つと割れますね」と言っている。

新庄の組で作った人形の乳母車について、堀は「紙ぢやあんなに遊べるものにならないからね。あの乳母車は何れだけ子供がしたの」と聞き、新庄は「子供がこゝはかうした方がいゝと云ふのはなるべくその通りにして切り度い子に切らせました。男の子は女はちつともしないで出来上つたら使つてばつかりゐるとおこつてゐましたから」と答え、二人とも子どもは自分達が作ったつもりだと見ている。

子ども達にまかせるということに関して、堀の「思ひ切つてやらせたらいゝ」という発言に対して、新庄は子どもから「離れてゐることはこわい」と言う。「子供によると鋸に注意が集りませんし、力も足りませんとそばにゐる子供が手をちよいちよい出しますからそれが危ぶない」と言っている。堀は「鎚で打つたつて大人が考へる程痛くない」という。また、「女の子でも大変面白い」「子供の時にやつてみなけりや、女の子などこの後もうすることなんかない」と述べている。

釘については、小さい細いのや頭が平たくて大きい釘は打ちやすいと話している。

「木工」の意義については、「思ひ通りになりにくいので面白い」「練習主義からいへば木工は甚だよい」「幼稚園の作業で汗の出るのは木工ぐらゐ」であるという意見を、堀は述べている。

自由製作が出来るのは、小学校の5、6年生くらいだという話もされている。

堀は幼稚園主事の後附属小学校の主事をしているが、当時の尋常小学校の手工で木工を取り入れる場合は、5年生からが多いことをふまえての話であると思われる。

おわりに

以上、欧米の幼児教育・保育施設での「木工」が日本に紹介された大正時代から昭和にかけての状況を見てきた。いつ頃から「木工」が幼稚園で行われたかであるが、前節で述べたように、1919年から記述が見られる。東京女子高等師範学校附属幼稚園では、倉橋惣三が渡米・欧から戻り、再度附属幼稚園の主事になった1922年以降であると思われる。欧米の幼稚園や保育学校で「木工」が行われているのを見聞きし、もともと手先の細かい筋肉より大きな筋肉を動かすことの必要を説いていた倉橋が奨めたと思われる。保姆達もはじめは不安に思いながらもやってみたところ、幼児が意外に上手で興味を持つことがわかり、「木工」が活動の一つとして定着していったと思われる。

東京女子高等師範学校附属幼稚園での「木工」の取り組みが、『幼児の教育』で紹介されると、他の幼稚園でも取り入れるところが出てきた。しかし、道具や材料の準備が大変であることに加え、堀が「子供の時にやつてみなけりや、女の子などこの後もうすることなんかない」といっているように、保姆自身の木工の経験がないため、すぐには広がっていかなかった。

東京女子高等師範学校附属幼稚園では、「誘導保育」として「人形の家」や「動物園」が取り上げられ、その中で「木工」が行われている。この「誘導保育」を中心に体系化した『系統的保育案の実際』が出されるのは1935年である。その後、この解説が『幼児の教育』に連載された。こうした状況の中で、「木工」の取り組みがどのように展開されたのか明らかにすることを次の課題としたい。

註

1. 『幼児教育』、日本幼稚園協会（以下の註では省略する）、第19巻第5号、1919、236頁。この雑誌は『婦人と子ども』として創刊され、第19巻から第

23巻第6号までが『幼児教育』、それ以後は『幼児の教育』となっている。本文中では『幼児の教育』という誌名を用いた。

2.『幼児教育』第21巻第2号、1921、54頁。

3.『幼児教育』第23巻第4号、1923、172頁。

4. 万国幼稚園協会編、日本幼稚園協会訳『幼稚園保育要目』、教文書院、1924。

5.『幼児教育』第23巻第5号、1923、201－212頁。

6. Harriet M. Johnson、青木誠四郎訳『保育学校の実際研究』、中文館書店、1924、39頁。

7.『幼児の教育』第25巻第3号、1925、86頁。

8.『幼児の教育』第28巻第11号、1928、7－20頁。

9.『幼児の教育』第28巻第12号、1928、2－16頁。ここに掲載されている写真は釘を打っているところのものを含め、7枚のうち6枚が『保育学校の実際研究』にある写真と同じである。

10. 同上書、30－33頁。

11.『幼児の教育』第29巻第2号、1929、2－8頁、第3号、2－9頁、第4号、7－16頁、第5号、8－15頁。

12.『幼児教育』第19巻第3号、1919、121－122頁。

13.『幼児教育』第19巻第4号、1919、165－167頁。

14.『幼児の教育』第25巻第7号、1925、11－14頁。

15.『幼児の教育』第28巻第10号、1928、65頁。

16.『幼児の教育』第28巻第11号、1928、55－58頁。

17.『幼児の教育』第29巻第12号、1929、50－54頁。

(引用文で、言葉の繰り返しに省略の記号が用いられていた場合、読みやすいように文字に改めた。)